城東まつり
（平成28年８月）

水運で賑わった寝屋川
（昭和30年頃）

格化、その跡地には公営、民間の高層住宅、学校、病院などが建設されました。

昭和42（1967）年から市営住宅の高層化が進められました。古市高層住宅団地がその第一号で、昭和44（1969）年に完成しました。鉄筋11階建て432戸、１階は吹き抜けのピロティ方式でした。さらに、今福中、今福南の高層団地が竣工、鴫野団地も続きました。

このほか、区内各地に高層の府営、公団、公社住宅や民間マンション、社宅が進出。大阪市内でも有数の高層住宅群が区内各地に出現しました。このため、昭和50（1975）年代には城東区の人口は再び増加に転じ、都市基盤の整備と相まって住のまちとして発展します。

鶴見区との分区

昭和45（1970）年の大阪万博を目標とする都市基盤整備が一区切りつく頃から、行政区再編問題が浮上してきました。昭和35（1960）年に300万人の大台に達した大阪市の人口は、高度経済成長とともに増加を続け昭和40（1965）年には315万6,000人にまで膨らみます。なかでも周辺区の増加が目立ち、城東区では25万1,000人と東区（当時）の５倍、昭和18（1943）年の区制発足時のおよそ２倍に達していました。このため、人口増加区と減少区の行政サービス、事務量の不均衡は限界に達します。

「大阪市行政区審議会」は、「分区は他区に比べて人口・面積の著しく大きい東淀川区、城東区、住吉区、東住吉区の４区」とする答申を市長に提出しました。分区に対する当時の区民の意見は賛否両論でしたが、昭和47（1972）年11月「分区条例案」が市会本会議で可決、成立し、区名も「城東区」「鶴見区」と決まり、昭和49（1974）年７月22日に分区が行われ現在の城東区の形となりました。これにより、城東区の面積は8.42㎢（当時公表値）、人口は15万6,083人で、大阪市は22区制から26区制となりました。

この年、分区を機に、城東区民のコミュニケーションを高めるため、他区に先駆けて「城東まつり」（区民まつり）が開催され、その後も夏の恒例行事として区民の皆さんに親しまれてきました。

消えゆく河川

かつて城東区内には、寝屋川を主軸とする８つの河川が縦横に流れ、その総延長は約16㎞に達していました。昭和25（1950）年から５か年計画で平野川分水路（城東運河）の掘削が始まり、昭和29（1954）年からは寝屋川水系の改修が開始され、さらに第二寝屋川も開削されました。

その一方で、昭和40（1965）年以降、埋め立てられる河川も出てきました。城東区内では、まず八ケ荘井路（はちかしょういじ）、三郷井路（さんごういじ）といった井路（人工水路）が埋め立てられ、道路に変わりました。次いで、猫間川（ねこまがわ）、鯰江川、榎並川、千間川、楠根川（くすねがわ）と長い間区民に親しまれ、水運に貢献した河川が姿を消していきました。

昭和40年頃の城北運河
大喜橋付近から今福北橋付近を望む

中浜下水処理場

井路も姿を消し、水郷の面影は時代の流れとともに薄れていきました。埋め立てられた河川の多くは道路に変わりましたが、千間川や楠根川は緑豊かな児童遊園や緑陰歩道に生まれ変わりました。

城北運河から城北川へ

城北運河は、水の都大阪でも、臨海部を除けば最後に開削された運河で、昭和15（1940）年12月に完成しました。寝屋川と大川を結ぶ総延長約5.6㎞、幅40mで、そのうち城東区内を流れるのは約2.1㎞です。

昭和30（1955）年代から40（1965）年代にかけての高度成長は、一方では生活環境の悪化を招きました。城北運河も、工場排水と家庭排水により水質が悪化したため、昭和41（1966）年から城北運河の浄化が始まりました。生活排水が流れ込まないよう、沿岸の下水道工事も併せて行われ、河岸公園と遊歩道整備も行われました。

昭和46（1971）年には、大川口、寝屋川口の水門操作が開始され、淀川からきれいな水を導き入れて汚れた寝屋川の水を締め出すことにより、水質浄化に成功し城北運河に再び魚の姿が見られるようになりました。

昭和60（1985）年には一級河川に指定、名前を「城北川」と変更し「ふるさとの川モデル河川」にも指定されました。「光のモニュメント広場」「水と彫刻の広場」「滝の広場」なども完成、遊歩道には照明灯が並び、子どもからお年寄りまで多くの方々に親しまれ、四季折々の花木や野鳥の姿は人々の心を和ませ、区民のオアシスとなっています。

平成18（2008）年には「城北川アピールプロジェクト」が始動、後に「アイラブ城北川プロジェクト」となり、区民の皆さんとの協働の取組みとして発展しています。

下水道元年

城東区域は、水運によって発展しましたが、反面、低湿地帯で排水事情が悪く、雨のたびに住宅・工場が浸水しました。城東区域では昭和11（1936）年、野江町、蒲生町で第五期下水道事業が始まりましたが、太平洋戦争で中断されていました。戦後の急速な市街化とともに区内の浸水被害はさらに激化、昭和27（1952）年７月の豪雨でも大きな被害を出しました。その後、区内各所にポンプ場や排水所を設けましたが、停電時には機能しないこともあり、昭和32（1957）年６月と７月の豪雨では再び大きな浸水被害を繰り返しました。

抜本的対策として着工されたのが、中浜下水処理場です。下水管敷設も突貫工事で進められ、昭和35（1960）年５月通水を開始しました。同時にこの年、大阪市全体で下水道整備10か年計画がスタートし、区内のいたるところで下水道工事が行われ、この年は「下水道元年」となりました。